
リグレクト

神岡シンゴリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リグレクト

【Nコード】

N4821N

【作者名】

神岡シンゴリス

【あらすじ】

知らぬ間に進んでいく心象風景を追いながら、ごくありふれた日常の中に宝物を見つけていく様を描いていくストーリーです。

男女の物語という点では恋愛ストーリーのようですが、期待するほど恋や愛に特化していません。

あまり期待せず、独特の世界観をお楽しみください。

空白の時間

思いもよらぬ方向へ、心が動きかけるのを止められない。

良くも悪くもまっすぐでいいヤツなんだろうけれど、とにかく面倒くさい性質をもっている。

頭隠して尻隠さずの前に、どこも隠していないにも関わらず、なんだかオドオドシタ面影が見えてしまう・・・
自分だけが知っている「寂しさ」のせいだ。

テキストに笑っていればいい人にみられるし、人に喜んでもらえばいい気にもなれる。

だから特に問題はない。

まっすぐに突き刺す太陽は東京の平均温度を更新したらしい。

トークをはじめ前のアイスブレイクには、
ちょうどいい話題を天気が提供しているかのようだ。

これもまた味方につける話になりそうだから、
今日は少しだけ話題をかえておこう。

きっと彼女は彼女なりに物語の中を駆け抜け、
ここで出会うことになっていたのだろう。

彼の方もいい加減な物語を過ごしてきた中で、
それでも自分で思うほどいい加減ではなかったのかもしれない。

二人は共に大切な人の死を経験している。

毎年夏になると思い出すのはお盆のせいとはいわないけれど、

笑っていても、どうしても涙目になる瞬間を隠そうとしてしまう。

誰にも気づかれない前に、笑顔を振りまくクセがある。

きつと風邪を引いたんだろうなって、
思うときがあるかもしれない。

心のお引越しが必要なのかな・・・って。

思いつきり感謝で見送ってあげられたら、
言葉は少なめでいい。

風邪が治ったら元気に語り合おう。

見送る言葉は「いつか」でちょうどいいみたい。

会いたいって気持ちは、いつだって本音だからこそ
思う気持ちなのだから・・・

心のお引越しはリノベーション。

新たに気持ちを切りかえる余裕があったなら、
もっと素直でいられるのかな。

信号を通り過ぎて、いつも通りに道を渡り、
手前の踏み切りで止まる。

2つほど電車が大急ぎで右から左へ、
左から右へと過ぎ去っていく。

この時間が刹那というほど短くないんだな。

見上げると夜空に満月が輝いている。

いつの日か聞いた「お月様、おいくつ？」という歌が、
あれからの時間を一瞬、脳裏に蘇らせる。

いくつも歴史を見てきた視線を輝かせて、
今夜はどんな世界を見せてくれたのだろう。

・・・僕たちは恋に落ちたのかもしれない。

(つづく)

憎しみを愛して

安易に恋に落ちれたらどんなに楽だろう。

ベッドの中で彼は彼の歴史を語りながら、
ダイレクトに体温が伝わってくる彼女の吐息を感じていた。

「それじゃー私の歴史を聞いてみたい？」

『どっしょっかな？』

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

踏み切りの手前からまっすぐに先を見下ろして、
少しだけ下り坂の斜面を渡りきったその時。

何も気にせず、ごく普通に通り過ぎようとした時、
視線を感じてうっかり振り返ってしまった。

そこに彼女がいた。

窓越しに見える表情は、はっきりとはわからなかったけれど、
見ているようで見てないような・・・

たぶん深夜だったからよくわからなかったのかもしれない。

けれど目だけが何かを物語っていた。

一緒にいた男性？・・・連れを置き去りにして、
店のドアから出てきたのには、思わずびっくりしたけれど。

これも何かしらのタイミングなんだと納得しながら、
どのタイミングなんだ！？ってツッコんでみたりして。（笑）

ようやく交わした一言はまるで暗号のようだったことを、
今も覚えている。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

シートの中で相変わらず足をからめてくる途中で、
ふと素になってしまう。

どうしてこの子のまつ毛は長くて美しいのだろう。

ポーツとしながら考えていると、耳を噛んできやがった。

少し痛かったけれど、彼が我慢しているのが結構楽しいようで、
されるがままにしていると、彼女は目で笑っていたっけ。

その笑顔が愛おしいなって思った、
コンマ数秒の刹那の中で。

“笑顔の先”を感じさせるような、
満点の微笑みを振りまくのは、女の武器を使っているようで、

なんだかズルイ・・・

と思ったから、得意のオカマキャラのスマイルで、
微笑み返してキャンディーズしておいた。

彼女は、あれからすぐに、
暗号を解読するキーワードを教えてくれた。

彼が理解するよりも前に「行こう！」と放ったのは、
その暗号がふたりには無意味なものであるから。
それを知らせたかったんだろう。

異常気象ともいえる連夜の暑さは、
今はクーラーが効いた部屋の中で忘れかけてる。

そういえば超放置プレーだと気まづくなったこともあったっけ。
何も知らずに、知らないことも知らなくて、
フェードアウトは定番の去り際。

物思いにふけてみようと思った瞬間に、
魔法の質問が飛んできた。

「一瞬ですごくいいことが起きたとしたら、どんな方法だと思う？」

正直な話、彼は絶句しただろうし、
彼女は小悪魔とは別の真顔で聞いたのだろう。

手を繋いだ指と指を絡めあいながら、
二人の呼吸は一瞬ハネた。

一瞬の「空白」を見逃さなかったといってもいいだろう。

それから彼女は思ってもみない爆弾発言をするのだけれど、
その30分後、指以外の場所も交わっていたことは……

ごく自然なナリユキだったのだろう。

(つづく)

愛がわからない

憎しみは愛情の裏返し・・・

彼女がした爆弾発言のことをここでする前に、
もう少しだけ彼は話したくなったのかもしれない。

よきせぬ話を聞かされる羽目になった彼女は、
興味深そうに尋ねてきたんだ。

シートでくるまれたふたつの裸体が、
ベッドの真ん中で泳いでいた。

空白の時間が映し出す時間と風景の中で、
そこに屈服するしかない自分を彼は感じていた。

「ということとは本音は愛情の裏返しってこと？」

『本音に限らず、いいたいことをいいあえる関係の話かな。』

密接する体温が伝えてくるのは、まさにリアルな世界といえよう。

この地球上からあらゆる体温が消えたとしても、
愛を語る前に、互いの温度で語り合えることがあるのだろう。

だから彼は捨てることを選んだのだった。

『あの時のオレは別の意味で大切なものを示したかったんだろっね。』

「だからって毒を吐けばいいってわけじゃないじゃない？」

『本音をいえば、それが毒とは限らないだろ？』

「でも随分傷ついたんじゃないかな？ 彼女なりに精一杯だったのかもよ。」

きつと憎しみを愛することも、愛情表現のバカバカしさなのだろう。

人間がもつ表現力は、時として人を傷つける。

もちろん愛を伝えることもある。

だからこそ生きてる。

いつか答えがわかるんじゃないかって思いながら・・・

『正直にいえば、オレは愛がわからないのかもしれない。』

「そんなに臆病になる必要はないと思うけど。これを握ってる限りでは（笑）。」

『真面目にしゃべってるんだから下ネタはねーだろーよ？』

「じゃー真面目に質問するけど、本当に好きだったと思えるの？」

質問に答えるまえに心に浮かんできたことは、

あまりにも正直な思いであり、過ぎ去った記憶だった。

彼は安心して愛したかったことに気づいていった。

「プライドが自分を作る人って、そうじゃないと生きていけないのかもね。」

『あのさ。オレだってマジで恥ずかしくてしかたがなかったんだよ。』

「だからといってプライドと恥ずかしさはイコールになるとは思わないけれど。」

『それって、ぶっちゃけアレの話でしょ。』

「爆笑問題って知ってると思うんだけど、なぜあの夫婦が成り立つかわかる？」

『よくわからないよ。』

「誰かの才能を本気で認めているんだとしたらさ。一緒に行動できる具体案を選ぶことだってできるんだと思うのよね。」

『……ってことは信頼や信じてもらってるという話になると思うん

だけれど。』

「だから難しいのよ。大人になるほど無闇やたらに飛び込んでなんていけないでしょ？」

『そこに愛がなければね。』

「愛だけじゃこの世を生きてくのは難しすぎる。そういう時代なのかもしれないね。」

一瞬空白がハネた。

そのおかげで饒舌になり、なにかしらのヒントを与えてくれたのかもしれない。

「人はどれだけ口でいっても、具体性と行動が、この先の物語をつくっていくと思うの。」

『物語？それぞれのストーリーのこと？』

「人を愛することも憎むことも、すべて物語の中にあるんじゃないかな。組み込まれたストーリーの中で、自分で選んでいくしかないってことよ。」

『あのさ、新たなアイデアが浮かんできたんだけど聞いてくれない？』

あの時の彼は精一杯だったのだろう。

どんなにプライドを捨てて前向きに進んでいこうとしても、やってくる毎日は過酷なノルマをつきつけてくる。

一方、彼女はそんなことは過去の歴史と受け取っているようで、人生は一瞬で、あっさりと変わってしまうことを知っているみたいだった。

何も問題ないから安心していいよって。

彼は試したり試されたり、上辺の会話で進んでいくことが、その後でどのような結果になるのか。

一部始終をシミュレーションしきったみたいに言った。

「実は来月は亡くなった母の2周年なんだ。ハロウィーンには苦い思い出があつてね・・・」

(つづく)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4821n/>

リグレクト

2010年11月17日02時53分発行